

# JAPAN TODAY

## 2019年 MONTHLY 8,9月号

ジャパン・ツディ編集部 村井実・編集長 ①160-0004 東京都新宿区四谷4の6の1 四谷サンハイツ1205号  
ジャパン・ツディは朝日、毎日、読売、産経、東京、日経、NHKにない独自の視点で解説。

### 令和元 参院選

# 「N国」と「れいわ」台風の目

# 国民そいつちのけ野党の火遊び

参院選(7・21、投票日) 票しても政治は変わらないが、本来自ら参院戦でなければならぬが、与野党の自民・公明は別として野党のふがいなきが相変わらず鮮明に浮き彫りにされている。

野党には「政治とは戦(いくさ)である」という真剣さがない。枝野幸男(立憲民主)、玉木雄一郎(国民民主)は野党の火遊びにみえる。だから、野党の政権交代が全々見えこない。

マスコミから見れば憲法改正に必要な与野党の「3分の2」に注目していたが、結果は与野党「過半数」で、とりえず過熱の改憲は遠のいた。

(目下、マスコミは朝日毎日、東京グループ対、読売、産経グループのつひひき)

しかし、国際情勢の急激な変化に日本はついていけないのか心許ない。

すでに報道されているように、今回の投票率は48・80%で5割を切り、戦後2番目の低さとなった。

なぜこのような数字になるかといえは、世論調査(朝日)でみられるように「投票日」

参院選(7・21、投票日) 票しても政治は変わらない結果的に無視した形で放置(32%)、投票したい候補者や政党がない(17%)となっている。

それほどの日本政治はドーンと沈んでいる、としか言いようがない。シンクタンク群、政治学者たちは、右の①②を分析してほしい。今、それも見えない。

与野党は後に述べるとして、今回の参院の全国32人の一人区全てに「統一候補」を立てた野党共闘は10勝22敗(3年前は野党共闘11勝)で与野党勝敗である。

(野党が勝った10人は新人9人、うち女性5人。8人が無所属だから野党の看板がなくても玉がよければ、与野党と互格に戦えることもハッキリした。)

ほとんどの新聞、テレビメディアは、「野党共闘は3年前に比べて1減だから善戦した」と言っているが、とんでもない。早くから真剣に、まともに野党共闘してれば互格の16席は取れた。

参院選は衆院解散と違って3年ごとに半数改選という決まった「行事」なので、野党はそれをほとんど結果的に無視した形で放置して、インスタンタラメン並みの選挙戦に突入。

その証左に今回の参院選は今年5月になって、ようやく野党統一候補選に動き出した。この野党統一候補は毎度、風頼みの他力本願。どこまで統一なのか、首をかかげる。

敵なる自民党は何と言われようと昨年12月末(又は今年正月)までには「自民公認」候補をそろえて、地道に政治活動を通じていた。従って、参院選は「自民大勝」と言えなくても、それなりの安倍政治の基礎を維持した。

**自民は大人 野党は学生運動の類**

私が野党に拘るのは、野党が強くなければ自民独裁(いや、自民独走か)も変わらぬ。日本政治が変わらないと考えているからです。

立憲民主と国民民主がしっかりとしないから、日本政治をぶちこわしている。自民を批判する前に野党の学会を笑う。野党の生徒会を笑う。

もう少ししじめに言う。野党を代表する立憲民主も国民民主も学生運動の域を出ていない。いや、学生運動以下だ。(自民の河野太郎外相、小泉進次郎は共に原発反対だが脱党しない。野田聖子は安倍首相に反旗で首相出馬の機会うかがうが、脱党しない。もつとやうー古い話だが民主時代の野田首相は、小沢一郎の消費税反対約50人の脱党を勧め、野田は実行した。

これで日本野党主流の民権派は死んだ。有権者の国民は多く、消費税反対が圧倒的に多い。野田の器の小ささを証明した。右のことから権力闘争に生きる「自民は大人」。旧民主は子供の学会か学生運動の類(たゞい)で野田は小沢グループを排除すべきでなかった。

小沢一郎を擁護しているわけではない。権力闘争とはそういうもので、権力を取れないければ政治の夢は一片たりとも実現しない。

そこで朝日(7・24)は立憲民主の枝野代表の「大きく成果を上げ、大きく前進した」や国民民主の玉木代表の「一定の成果が出た」をそのまま批判なく持ち上げていた。他紙もNHKも似たり奇たりだ。

とりわけ日本マスコミは与野党に辛いのが野党に、ことさら甘く、これでは日本には野党は育たない。枝野、玉木の両氏は駅前などの大衆を前にして、「演説に酔っている」としか言いようがない。どんな立派な公約をしようとも、野党はしょせん野党。野党では予算の1円でも動かさない。

野党の本丸・連合は立憲民主(自治労などの官公労系)と国民民主(電力総連など民間労組系)に分かれ、参院選比例区で5人づつ計10人を立てた。

立憲は5人全員当選したが、国民は2人落選。国民から出た電器連合の組織内候補は個人票19万超を獲得し、立憲のトップ当選者を3万票余りを下回ったが、当選枠に入らなかった。

連合の神津里季生会長は記者会見で「2度どころか3度の選挙はやりたくない」と嘆いた。旧民主進党が2つに分かれた歪(ひずみ)は比例に端的に表われた。

右の言葉が真実だ。元を正せば立憲民主も国民民主も旧民主の同じ穴のむじな。旧民主は今回の参院選で立憲(改選議席9)と連立(17)、国民(同8)と(同6)で立憲は倍増した。ところが憲法以外では同根であり、やがて立憲と国民は巨大な自公政権の前で「収束(あひみ寄り)せざるを得なくなる時期がやって来よう。それも出来なければ、令和時代は別の新しい政党が伸びていく。

総選挙でやがて枝野・玉木の野合のX日くる!

世界がこれほど激動不安な時代(米朝の核交渉、中

米貿易、日韓悪化、自衛隊(ゆるめた)ファンド)が続けようとするのか。この参院選野党惨敗で枝野・玉木はやがて総選挙に向けて野合するX日があるだろう。

それにしても旧民主時代からの悪しき伝統をここに指摘しておきたい。次に述べる私の意見は関東の有力な知事と一致した意見でもあるが、国政選挙で失敗して議席を減らしても主要三役はじめ主要大臣たちは「責任」をこらさず、その後何らかの役にとどまってしまう不思議。

本来なら枝野も玉木も責任をとらなければならない立場。双方ともケンカ向成敗で両代表とも辞任して後任にバトンタッチすべしなのである。それを全然実行しないのは民主主義でない。かつて自民党の三角大福ル放送を主張しているが、私も大賛成だ。

参院選告示の数日前、元ニューズキャスターの久米宏氏がNHKの朝の番組で「政府国営のNHKが人事権と財政権を握るのは自由主義国家になじむものでなく世界でも、こんな民主国家はない」と批判した。私も同感だ。

そこで、政治が与野党とも、こんなふうたらな日本政治なら、「れいわ」と「N国」が合体して次の総選挙で自公を脅し野党を驚かせ、自らの力を発揮してほしい。

令和元年(2019)7月27日 村井実



村井 実 (むらい・みのる)  
北海道日高村(現・日高町) 番外地生まれ。昭和43年、早大卒。毎日新聞記者を経て昭和48年、時事通信記者。警視庁記者クラブを経て国会記者。田中角栄から自民党歴代首相を取材。その間、ロッキード事件、田中金脈事件、リクルート事件を担当。宮内庁記者。昭和63年米国スタンフォード大学フーバー研究所入所。米国大統領のフォード、カーター、ブッシュ、さらにケネディー一族や英国のエリザベス女王、サッカー首相などインタビュー、単独会見。早大など3大学で教鞭をとる。「ジャパン・ツディ」編集長。

自らは東京の選挙区から比例に転出したため落選したものの、比例区候補では99万票の個人票を集めた。この99万票は次の衆院選では100人規模の候補者を立てるといふから、台風の目となる。都内で売れゆきのよい夕刊タブロイド紙は次の「れいわ」票で「36議席」と早々と予測する数字まで掲げている。

一方、「NHKから国民を守る党」(N国)は参院比例区で1議席を得た。「NHKをぶっ壊す」を合言葉で代表となった立花孝志は、衆院選で出馬してなる可能性が高い。(注・19年の統一地方選では東京、千葉などで26人の公認候補当選)

立花氏は受信料を払った人だけがNHKを視聴できないようにする「スクランブル放送」を主張しているが、私も大賛成だ。

参院選告示の数日前、元ニューズキャスターの久米宏氏がNHKの朝の番組で「政府国営のNHKが人事権と財政権を握るのは自由主義国家になじむものでなく世界でも、こんな民主国家はない」と批判した。私も同感だ。

そこで、政治が与野党とも、こんなふうたらな日本政治なら、「れいわ」と「N国」が合体して次の総選挙で自公を脅し野党を驚かせ、自らの力を発揮してほしい。

令和元年(2019)7月27日 村井実

# あほう 日本軍閥が阿呆だった太平洋戦争

**開戦直後、石原莞爾は「この戦争は負けますなあ。アメリカの財布に百万円、日本千円。日本兵280万戦死というが7割は餓死。」**

昨年(H30年)春に出版されたのだが、半藤利利著「歴史と戦争」(幻冬舎新書、208頁、780円)——これほど読みやすく、面白く、わかりやすい本書の日本敗戦までの本はない。歴史ものは時代の空気に流されたり、色メガネで見られたり、偏向思想のケースが多いが、半藤氏は戦争を庶民の目線から述べており、真実を貫かれています。

私はジャーナリストとして半世紀生きてきて思うことは、日本はあの太平洋戦争で、なぜ310万人(兵士280万人、民間人30万人)もの死者を出したのか。

年をとればとるほど、死ぬまでこのテーマを迫っていかねばならない日本人・私の使命とまで勝手に考えるようになった。この本は私の人生の中でハイブール(聖書)となるほど、重みのある日本歴史書である。

その中から重要な点をダイジェスト版として私なりにあげると、次のようになる。

国家財力なく情報無視しては勝ち目なし

その1、タイトルは「昭和16年春、石原莞爾の予言(78頁)、その中で半藤氏は次のように語っている。「彼は昭和16年に陸軍を退き出されまして、そのあとに對

でも立派に通用しており、地球が良きにつけ悪きにつけアメリカにふりまわされる現実、国力イコール戦争力で証明されている。米に千円しかないのに、1万円の買物をするようにしているのだから、負けるに決まっている。アメリカは百万円を持って1万円の買物をしていく。そんなアメリカと日本が戦って勝てるわけありません」と。

私・村井は50年以上も前、カナダのモントリオール・オリンピック特派員を終えてワシントンやニューヨークに入ったが、この時にニューヨークのエンパイア・ステートビル(400階建て)にエレベーターで頂上(屋上)まで行った。

この超高層ビルは正時時代にアメリカは着手しており、こんな大國と戦ったこと自体、私はなんと日本は無謀な戦争に突入したのかと思つたのです。

その当時(太平洋戦争)の日本の国力(戦力)は露の差で、月とスッポンとは、この差だ。

この石原発言の眼力はすごい。この「歴史と戦争」の本の中の庄野とあるが、この発言の重みが敗戦後、それほど国民に伝わっていない。

私が言いたいのは、要するに「正義を押しつけ戦争」とは国力であり経済力である。その理論は21世紀の今日

でも新聞記者出身の私は主張したい。東條英機と同じ年の山本五十六(連合艦隊司令長官)は36才で渡米してハーバード大学で学び、42才で日本大使館の駐在武官。合計6年間のアメリカ生活を過ごしている。

ここで山本はイヤというほどアメリカの国力(軍事力)を知った。ゆえに、山本は負ける戦争を回避したかった。それがほとんど生かされておらず、時の政府は死を覚悟して空で戦った(S18、4月、60才)。

そこで言いたいのは情報を持たない国は滅亡するといふこと。駐米武官たちの電話は「盗聴」されていた。大本営は情報を知っていたことが命とり。310万人の英霊に申しわけがたない。

しかし、私は日本歴史をひもとく中で、あの戦争は敗戦後、70年経ったとしても侵略戦争であり忘れてはならない。歴史教科書の中で敗戦をきちんと説明すべきだと思つた。

それがいいから「あの戦争は戦争じゃなくて自然災害」にでもあったように風化してきた昭和後半と平成世代の若者に伝えていく義務がある。

特に日本の歴史ものはウソ、美化、英雄扱い多く、ライシャワー氏(ハーバード大学教授、駐日大使)の著書「ジャパニーズ」の日本史のほんが日本戦争に中立のほが参考になる。

また、半藤氏は「歴史と戦争」の本の中で、次のように解説する。

「一億総士(中略)みんなして悪かったんだから、お互いに責めるのはよそうじゃないかという『なあなあ主義』にもつながり(中略)そしてこの矢張りなんとなしに、『さういふもんか』と、責任追及しなくなつた印象があるので(140頁)。

右の問題について同氏は「A級戦犯(中略)私個人は考え(181頁)と題して次のように主張。

(前略)靖国神社では昭和53年、A級戦犯の14名を昭和殉難者として合祀した。日本国民に対して、とてつもない戦争責任を負っている彼らが、なんと殉難者だといふのです。たしかに彼らは戦犯(犯罪者)でなくはなかったが、戦争を起し遂行した責任者。はたして、その戦争責任者の中に非業の死を遂げた殉難者と呼べる人がいるか。

さらに次の142頁では「大東亜共栄圏も、戦争指導者の根拠として、あとからとってつけた政治的目標にすぎなかった。

私の意見をばさむと「大戦では日本はアジアの二部を解放して独立国にした」と説明する人もいるが、これこそ敗戦後とってつけた歴史観だ。最近の政治の総選挙、解散も理由はあとからつけてくるか、あなかつたか。

とからとってつけた政局スローガンが多い。

新聞は商売のため軍部と一緒に走った

その4、として私・村井は勝手に次の文を紹介したい。「さうした日本をおおつた空気がその後、ずっと歴史を知らない数世代を生み出し、あれから70年が経つたのである。

歴史を学べ、との声がかきりに繰り返しても、歴史から何を学ぶかについての答えが容易でないのは、やむを得ないのである。

私も半藤氏と同様「歴史を学べ」と再度、申しあげたい。半藤氏は「歴史から学ぶのは容易でない」と謙虚だが、半藤氏の「歴史と戦争」を読めば答えが出てくる。

半藤氏は、この本の末尾で次のようにしめつけている。

「(前略)万世に系する天皇は神である、日本民族は世界に優秀であり、この国の使命は世界史を新しく書きかえることにある。

日本軍は無敵であり、天にまします神はかならず大日本帝國を救い給うのである。

このゆるぎないフィクションの上に、いくつもの小さなフィクションを重ねてみたところで、それを虚構とは考えられないのではなかつたか。

③エリート意識と出世欲

大本営の学校秀才的参謀どもの作戦は無謀

その2、は「餓死者70パーセント」のタイトルの中(152頁)で「大本営の学校の秀才的参謀どもの机上で立てた作戦計画のために、太平洋戦争において陸海軍将兵(軍属も含む)は40万人が餓死した(屋上)まで行った。

このうち広義の飢餓による死者は70%に及ぶ。余りに手を広げすぎたために、食糧、薬品、弾丸など補給したくても、ともかかわぬ粗末だ。

兵隊はガリガリの骨と皮となつて、無念の死を死ななければならなかつた。

その3、は「なぜ日本人は終戦と呼んだのか」(138頁)のタイトルの中で半藤氏は次のように語る。

「明らかに敗戦なのに『終戦』と呼び替へたことが『負けた』という事実を認めようとしな。あるいは、それを隠蔽化しようとする指導者たちの詐術のごとくに、批判的に指摘されている。それはもう、そのとおりである。

しかし、当時、国民が敗

戦を終戦と呼んだのは、単に「敗戦」という表現を嫌うという理由からだけではないうように思われる。

そこには一億総兵士一億玉砕まで戦うという総動員体制がスウーと消え去つたという安堵感があり、とにかくこれ以上戦わなくていいのだ、戦争が終わつたのだ、という安心した気持ちに「終戦」という言葉はピッタリ国民的な実感があつたのである。

この当時の世論は全くかわらないが、(敗戦時、私は2才)半藤氏の言うようなのだ。

しかし、私は日本歴史をひもとく中で、あの戦争は敗戦後、70年経ったとしても侵略戦争であり忘れてはならない。歴史教科書の中で敗戦をきちんと説明すべきだと思つた。

それがいいから「あの戦争は戦争じゃなくて自然災害」にでもあったように風化してきた昭和後半と平成世代の若者に伝えていく義務がある。

特に日本の歴史ものはウソ、美化、英雄扱い多く、ライシャワー氏(ハーバード大学教授、駐日大使)の著書「ジャパニーズ」の日本史のほんが日本戦争に中立のほが参考になる。

また、半藤氏は「歴史と戦争」の本の中で、次のように解説する。

「一億総士(中略)みんなして悪かったんだから、お互いに責めるのはよそうじゃないかという『なあなあ主義』にもつながり(中略)そしてこの矢張りなんとなしに、『さういふもんか』と、責任追及しなくなつた印象があるので(140頁)。

右の問題について同氏は「A級戦犯(中略)私個人は考え(181頁)と題して次のように主張。

(前略)靖国神社では昭和53年、A級戦犯の14名を昭和殉難者として合祀した。日本国民に対して、とてつもない戦争責任を負っている彼らが、なんと殉難者だといふのです。たしかに彼らは戦犯(犯罪者)でなくはなかったが、戦争を起し遂行した責任者。はたして、その戦争責任者の中に非業の死を遂げた殉難者と呼べる人がいるか。

さらに次の142頁では「大東亜共栄圏も、戦争指導者の根拠として、あとからとってつけた政治的目標にすぎなかった。

私の意見をばさむと「大戦では日本はアジアの二部を解放して独立国にした」と説明する人もいるが、これこそ敗戦後とってつけた歴史観だ。最近の政治の総選挙、解散も理由はあとからつけてくるか、あなかつたか。

とからとってつけた政局スローガンが多い。

新聞は商売のため軍部と一緒に走った

その4、として私・村井は勝手に次の文を紹介したい。「さうした日本をおおつた空気がその後、ずっと歴史を知らない数世代を生み出し、あれから70年が経つたのである。

歴史を学べ、との声がかきりに繰り返しても、歴史から何を学ぶかについての答えが容易でないのは、やむを得ないのである。

私も半藤氏と同様「歴史を学べ」と再度、申しあげたい。半藤氏は「歴史から学ぶのは容易でない」と謙虚だが、半藤氏の「歴史と戦争」を読めば答えが出てくる。

半藤氏は、この本の末尾で次のようにしめつけている。

「(前略)万世に系する天皇は神である、日本民族は世界に優秀であり、この国の使命は世界史を新しく書きかえることにある。

日本軍は無敵であり、天にまします神はかならず大日本帝國を救い給うのである。

このゆるぎないフィクションの上に、いくつもの小さなフィクションを重ねてみたところで、それを虚構とは考えられないのではなかつたか。

③エリート意識と出世欲

「歴史と戦争」の本の中の庄野とあるが、この発言の重みが敗戦後、それほど国民に伝わっていない。

私が言いたいのは、要するに「正義を押しつけ戦争」とは国力であり経済力である。その理論は21世紀の今日

**日本での米国テキサス不動産販売実績 No.1 米国不動産 年平均4%上昇**  
 1000万円で購入可能な米国テキサス州のワンルームマンション! 日本の金融機関を使って住宅ローンでも購入できる

**テキサス不動産の3大メリット 減価償却★インカムゲイン★キャピタルゲイン**

私たちは、日本国内で米国テキサス州の不動産販売を行なっており、過去4年間で約2500物件を販売した、米国不動産販売で断トツNo.1のリーディングカンパニーです。実は、日本をはじめとする世界中からの投資が集まっている地域が米国テキサス州であり、法人税と個人の所得税がほぼかからないことでも知られています。近年、数々の国内外大手企業が進出、トヨタの米国本社も2017年にテキサスへ移転し、JR東海の新幹線が4年後に開通予定と、今後さらなる人口増加と経済成長が見込まれています。実際にご購入されたお客様からは、大きな節税効果、安定した賃料収入、そして、将来性の高い資産価値に大変ご満足いただいております。米国不動産の取引ですが、弊社スタッフが100%日本語でご対応いたしますので、安心してお問い合わせいただくことができます。

**お申込み FAX 番号 ☎ 03-5614-9878 WEB お申込みも可能→**

弊社担当	大森	株式会社リーバンスコーポレーション 紹介取次店・代理店 三愛ハウス株式会社 フリーダイヤル: 0120-57-1093 (携帯可)
取次・代理店担当		TEL: 03-5614-9877 (代表) FAX: 03-5614-9878 ✉ info@mytexasfudosan.com ☎ www.mytexasfudosan.com

東京都中央区日本橋箱崎町 20-1 アンソレイエ・オオタ 4階

# だし 良くも悪くも天皇を山車にした侵略

・半藤一利氏は東京大空襲の死線を  
 さまよい敗戦を見てきた歴史学者。  
 ・氏の「歴史を学べ」を日本の若者に贈る。

が横溢

④偏差値優等生の困った  
 小さな集団が天下を取って  
 いた。

⑤一番最後に、底知れず  
 無責任。これは今でも続い  
 ている。

私(村井)からみると右  
 の①から⑤は冒頭の「昭和  
 16年春、石原莞爾」の言葉  
 に集約される。

私・村井は読者に言いた  
 い。右の「これは今でも続  
 いている」とはその通り。  
 モリトモ、カケ疑惑、厚生  
 省の統計のデタラメ……ど  
 もこれも平成末期に残した  
 茶番劇であった。

勝海舟 政権側近だっ  
 たら違った形の日本史

「その5」として私(村井)  
 は番外編に半藤氏の「もし  
 勝海舟なりせば」(18頁)  
 のタイトルの下で、次のよ  
 うに述べている「固を重くみ  
 る」。

「(前略)もし、勝海舟が  
 いなかったら、近代日本は  
 おかしくなっていただしよ  
 う。英仏という列強の代理  
 戦争ともいへば内戦が長  
 引いて、分裂国家になった  
 可能性がある。  
 外国の支配を受けること  
 になったかもしれず、明治  
 維新など言っているならな  
 かったかも知れない。」

その5の中に次のタイト  
 ル「日清戦争に異を唱えた  
 勝海舟(28頁)で、半藤氏  
 は次のように解説。

日清戦争について「日本  
 の大開戦の戦いである。  
 こういふ余計な戦争をして  
 突っ込んでいく、かえって  
 朝鮮半島が他の国の餌食に  
 なる。」

むしろ、清国とは日本の  
 貿易のため、商業なり工業  
 なり、鉄道なり、全てにお  
 いて、支那5億の民衆は日  
 本にとって最大のお客さん  
 である。

この勝海舟の洞察力はず  
 ごい。こういう時代に日本  
 に偉人がいたことに私・村  
 井は脱帽だ。

勝がもつ成長して日  
 本の政治の中心にいたなら  
 日本はもっと違った形の日  
 本史を形成していたであろ  
 う。

数年後、私(村井)は  
 現在鎌倉に住む勝海舟の玄  
 孫(やしゅじゅん)の息子  
 と会い、その後も何度かパ  
 ティなどで会い「人間・勝  
 海舟」の人物像を聞いてい  
 る。彼女の説明もなかなか  
 のもので、さすが慶大卒  
 才女だけの実力もある。

日本は明治、大正、昭和期  
 あちこちで活躍した偉人像  
 を建立しているが、勝海舟  
 「その日本史に残る人物と  
 して称(た)びえてほしい。  
 西郷隆盛と勝の巨頭会談  
 (私は学生時代)水川清話  
 を読破)によって「江戸の  
 無血開城」となったのも勝  
 のおかげ。このため江戸の  
 姿が残り、今日の「観光東京  
 が生まれている。」

同じ、その5の中に、半  
 藤氏のタイトル「満州国を  
 持たがために」(135頁)  
 を関連で加えたい。

「満州国」という巨大  
 な「領土」を持ったがた  
 めに、分不相応な巨大な  
 軍隊を編成せねばなら  
 ず、それを無理に保持した  
 がゆえに、狼的な軍事国  
 家として政治まで変質した。  
 それが近代日本の悲劇的な  
 歴史というものである。」

敗戦後、侵略反省ツメの  
 アカもない作家、文化人

その6、「日本人は12月8  
 日のラジオ放送をどう聞い  
 たか」(80頁)のタイトルで  
 は半藤氏は次のように書い  
 ている。(中略)

長与善郎は「生きてい  
 るうちに、まなごんを感し、  
 こんな痛快な、こんなめで  
 たい日に遭えるとは思わな  
 かった。」

徳川夢声は「今日の戦果  
 を聴き、ただ呆れる」「さ  
 らに翌9日には「あんまり  
 物凄い戦果であるのでヒッ  
 タリ来ない。日本海軍は魔  
 法を使つたと思えない。  
 いくら万歳を叫んでも追  
 つかない」(以下略)

「私は不覚にも落涙した  
 と詩人、高村光太郎。社会  
 学者の清水幾太郎は「日本  
 は是非でも英米に勝たね  
 ばならぬ」(以下略)

武者小路実篤も「愚かな  
 のはルースベルト、チャー  
 ル、ハル長官たちである。

日本を敵にまわす恐ろしさ  
 を英米の国民が知らないの  
 は当然だが、彼ら責任者が  
 それを知らなかったのは馬  
 鹿手紙だ。」

そして半藤氏は言う。  
 「つまりは多くの日本人は  
 12月8日をこのように受け  
 とめたのだ。ほとんどが真  
 珠湾の戦勝に狂喜し、だれ  
 もがこの戦争を『聖戦』と  
 信じた。あるいは信じよう  
 としたのである。」

「真珠湾攻撃大成功の報  
 せを受けて」(86頁)のタイ  
 トルの中で、半藤氏は次の  
 ように書いている。

小学校5年生であった私  
 は、ほとんどの大人たちが  
 興奮して晴々とした顔をし  
 ていたことを覚えている。  
 評論家の小林秀雄は「大戦  
 争が丁度いい時に始まって  
 くれた、という気持ちなの  
 だ。」

亀井勝一郎は「勝利は日  
 本民族にとって実に長い間  
 の夢であった……」(以下略)。

作家の横光利一は「戦いは  
 いに始まった。そして大勝  
 した。先祖を神だと信じた  
 民族が……」(以下略)

「ここから私・村井の意見  
 だが、当時の戦況情報は限  
 られた大本営発表のもの。す  
 なわち官制情報で異常事態  
 だったから、右に登場した  
 作家、文化人たちの熱狂ぶ  
 りは仕方ないとも思う。」

しかし、彼らの敗戦後の  
 姿をみると、戦争に対し  
 する反省がツメのアカほど  
 たんずから。

この本の終わりの第  
 4章で半藤氏は「私が週刊  
 文春、創刊号に書いた記事」  
 (177頁)のタイトルの中  
 で、次のように記している。

「昭和34年(1959)4  
 月、まさに結婚に合わせ  
 て『週刊文春』が創刊。私  
 歴史の中で④⑤は軍事に日  
 本を敗つて終戦。」

「お祝いせず」「馬車かゆ  
 砂利がきしむ音がする。そ  
 の音は何百万の戦死者のう  
 めきと聞こえるであろう。」

なんて調子で、若気の至り  
 と言いますか、そんなこと  
 もありません。

若気の至りなんかじゃな  
 い。名文だ。私(村井)か  
 らみると、太平洋戦争とは  
 良くも悪くも「天皇」をダ  
 シにした大戦争だった。

半藤氏はとあるたびに  
 「歴史と戦争」の本の中で  
 昭和天皇を登場させている  
 が、旧憲法(明治憲法)と  
 天皇制度の中で追い込まれ  
 ていく天皇の姿と敗戦によ  
 る悔悟の天皇の姿が痛  
 ましいほどに伝わっている。

「開戦力目前、大本営が  
 考えた戦争の見通し」(79頁)  
 のタイトルでは、半藤氏は  
 次のように記している。

「十一月十五日(昭和16  
 年)、大本営政府連絡の会  
 議は十分に討論した(中  
 略)①(村井が省略)③  
 独ソ戦がドイツの勝利で  
 終わったとき④ドイツの  
 イギリス上陸が成功し、  
 イギリスが和を請うとき、  
 その時にはアメリカは、戦  
 まし作戦は許されるもので  
 はない。」

「昭和十七年八月のカダ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。

「昭和三十七年八月のカ  
 ルナルの翌日に記者は見  
 た」のタイトル(90頁)で  
 半藤氏は次のように言  
 う。」

## 尾野玲子ライオンコンサート 37th

2019年10月25日(金) ライオン銀座7丁目(5階) 音楽ビヤプラザ店  
中央区銀座7-9-20 地下鉄銀座駅 A3出口 徒歩4分 Tel.03-3573-5355

### 入場料

- 昼の部 6,000円(コンサート&1ドリンク・デザート) ■昼の部 13:30開場 14:00コンサート
- 夜の部 5,500円(ご飲食代は含まれておりません) ■夜の部 17:30開場 19:00コンサート

### お申し込み方法

下記の口座にお振込みいただきますと、こちらから入場券を郵送いたします。  
 昼の部・夜の部 全て指定席となりますので、お早めにお申し込みください。  
 尚、勝手ながら10月17日(木)をメ切りとさせていただきます。

### お振込先

- 郵便局 口座番号：00280-7-39367 加入者名：尾野玲子

尾野玲子オフィス  
TEL 090-1858-2868



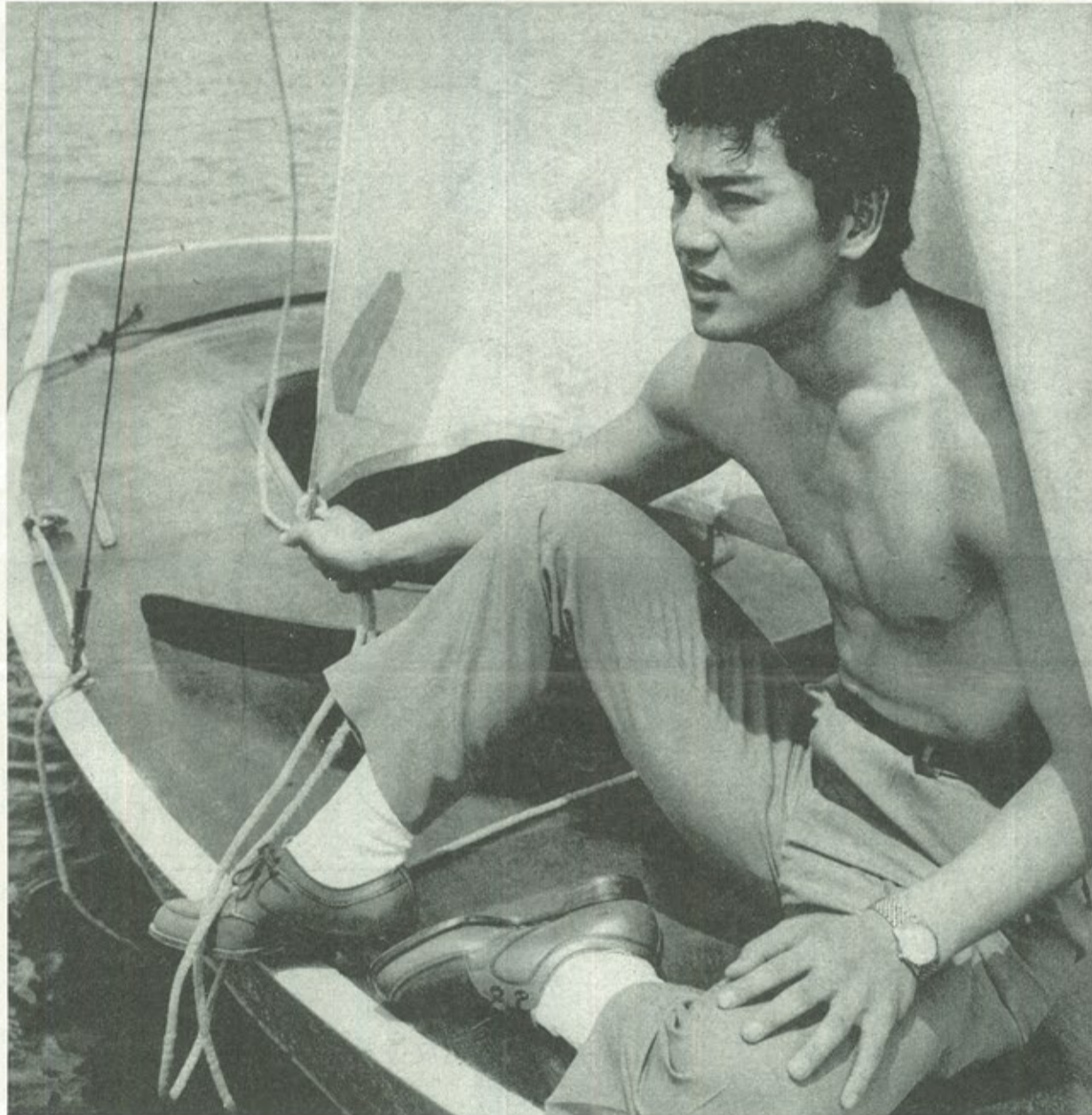
# JAPAN TODAY

## 2019年 MONTHLY 8,9月号

新聞は時代を映す鏡である！(ジャパン・ツディは全国47都道府県庁、地方自治体に配布しています)  
過去の歴史を学ばない者は、再び未来の歴史を誤るということを日本国民は知らなければならない

# 男の美学・赤木圭一郎の時代

- 昭和35年は赤木日活映画の全盛期。
- 命日には今も女性ファンが墓に献花。
- 野性の赤木は今も日本人の魂を揺さぶる。



- 赤木は海が大好きだった。
- ヨットに乗ることが大好きだった。
- 青春時代の夢は船乗りだった。

君は赤木圭一郎を知っているか？日活のスターだった赤木は日活撮影所内で、ゴカートで壁に衝突。昭和36年2月だった。1週間後に死去。21歳。

私は当時、小樽の高校2年生。午後、雪降る下宿に帰って、ラジオのスイッチを入れると「赤木の死」を知った。わずか1年間で13作品を残して散った。

裕次郎、小林旭に次ぐ第3の男として日活を立って立つとみられていた。私は落胆した。

当時も今も芸能人は星の数ほどいるが、私の青春時代から今までの「孤独」と「哀愁」が似合うのは、やはり赤木しかない。さらに男らしい野性の魅力。

平成19年5月、生前、赤木のロケ地でもあった千葉県房総半島の鴨川市で、赤木没後50年に向けて懇談会主催の写真、遺品、サイン、グッズ展があった。

この会場に入った瞬間、赤木の上映ポスターが満載に飾られ、私は一瞬、昔の高校生の私に逆戻りした感覚に襲われた。

会場には50、60人いたが、年齢は男女とも50代ぐらが多かった。若者もいた。その中で知らない者同志の間から、中年男性がこの日の懇談会のために沖繩から飛行機でやってきた——と、同輩に近しい私に寄ってきて名刺を差し出した。

名刺を見ると、琉球大学の教授。私はビックリした。このために沖繩から千葉まで……私ほうなつた。

会場では私は若者とはほど遠いおやじだったから名刺を差し出すのをためらっていた。しかし、沖繩の教

授から堂々と名刺をいただいたので、私も大学講師の名刺を出した。すると沖繩の教授もビックリ。「ファン」とはいくつになっても「ファンだ」とお互いに大笑いになった。

こんなところで冗談を言うつもりはないが、日本の若者に告ぐ！LGBTなんぞにのめり込まないで「男の美学」の象徴、赤木圭一郎がこの世にいたことを忘れないでほしい。

ここに相馬尚文著「輝ける分水嶺——1960年代の日本(赤木圭一郎の時代)」という本がある。相馬氏は昭和20年生まれで東大法学部。大学1、2年次は安保闘争もへって来たがサラリと総括して一般学生生活。卒業後、金融界に入っ

て右の異色の本(平成17年初版)を発行。

相馬氏は私は同世代であるが、赤木映画の本質は「哀愁」であり「孤独」というのも、私と波長が合う。早世したから国民的大スターとはならなかったが、赤木がもし、長生きしていれば日活映画が消えることもなかった。赤木じまあと、映画界は東映のヤクザ路線に持っていかれた。

相馬氏は言う。「私からみれば、彼は最初は年上の兄貴。途中から同世代の友人。その後の大部分は年下の後輩であり、今や息子のようなものとなってしまった。

彼があたかも北極星のように、私の変化、老化をいやおうなく突きつけてくる。だから私も目をそらすことなく、この永遠の青年を見つめざるをえないのである。」

この本の内容は3分の2は敗戦後の日本復興の経済、文化、世相などをあけて解説。

一方で氏は昭和35年当時の日活アクション映画について「赤木を主役にして取り巻きの黒幕は本当に悪人でないケースが多い」と作品の質の高さをほめる。

そして当時の昭和35年アクションを参考に、日本は岸政権に反対して(自衛隊も投入せず)岸内閣が倒れても、「革命」もなく、自

民党政権が続く自由な国が続いた——この空気は日活のアクション映画にも相似する、と説く。政治をスター赤木にからめて1冊の本にしたことがおもしろい！

それにしても当時の岸アクション政治と赤木アクション映画をラブレンドして、我々読者に見せてくれた筆力はさすが東大卒のアタマ。相馬氏は赤木を愛し、童心と青春のエネルギーを私たちに与えてくれたことに感謝する。(村井 実)

ある。

※ジャパンツディ賛同者は下記銀行に入金して下さい。  
▼振込み先・三菱UFJ銀行札幌支店  
口座名「ジャパンツディ代表 村井 実」  
店番 637 口座番号 3477659